

---

# 少女、陰陽師.

桜凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女、陰陽師

### 【コード】

N0507Y

### 【作者名】

桜凜

### 【あらすじ】

私立城ヶ白学園

エリートによるエリートの為のエリート高校

そして、普通の人間は入学出来ない

一人の陰陽師少女×美少年アイドルグループの恋物語・

(1) 少女、凜・

2040年、5月、人間界。

私立城ヶ白学園。

エリートによるエリートの為のエリート高校である。  
ークラス10人、一学年4クラス40人と言う小規模な高校である。

城ヶ白学園には、普通の人間は入学出来ない。

どんな意味かと言うと、能力のない人間は入学出来ないと言う意味である。入学出来る者の例は、超能力者(能力者)・陰陽師など、一般的な人間が持たない能力を持っている者だけが入学出来るのだ。そんな高校に一人の少女が通っている。

「凜、次、能力別授業だよ？」

小曾根凜<sup>おそねりん</sup>。

2・3、アニメ大好き(オタク)、眼鏡っ子、完璧美少女。  
そしてなによりも鈍感少女である。

「え、あ、うん。」

小曾根凜、小曾根一族期待の陰陽師である。

2040年5月現在、陰陽師は三つの一族に分かれている。その一つが小曾根一族であり、小曾根凜は小曾根一族の中でも断トツと言っても良い位に強い、そして完璧な陰陽師である。

全国でトップだった父もぬいてしまった程の小曾根凜だ。

「私、何処だっけ……？」

「陰陽師は確か……校庭じゃなかったっけ？」

「ありがとう、亜美佳？」

吉倉亜美佳<sup>よしくらあみか</sup>。

2 - 3、吉倉財閥の令嬢。

超能力者、能力はアタッククラッシュ（念動砲弾）。アタッククラッシュと言うのは好きなどころに爆発を生み攻撃や自分の加速度を上げたりできる能力である。一般的な超能力者は能力は一つしか持っていない。一つ以上持つと自分の体が危険な状態になってしまうからである。だが亜美佳は二つの能力を持っている。その能力とはダミーチェッカー（認識阻害）である。簡単に言えば、自分の姿を消せる能力である。

そして、歌手でもある。

ビューン……

「風……」

強く、冷たい風が吹いた。

「おかしいなあ……。今日の天気は晴れだったんだけど……」

「……」

小曾根凜は窓から校庭を覗いた。

小曾根凜は感じていた。  
何かを。

## (2) 私立城ヶ白学園

2040年現在、日本の人口の68%は何らかの能力を持っている者がいる。その内、88%は未成年（子供）である事が最近判明した。

城ヶ白学園はここ、東京にしかない高等学校であり、毎年の受験者数は1000人を超えるがその中で40人程度しか合格は出来ない。40人が一学年の定員であるから。

城ヶ白学園は西暦2018年から三年間にわたって行った建設工事が終わり2021年に新入生を新しく迎えた。当時の新入生数は15人と少なかったが城ヶ白学園の初代理事長の活躍で2025年には新入生が200名を超えた。

2025年当時の日本は、人口の90%以上は何らかの能力をもっている者であり、その内の85%は未成年（子供）と言う確率であった為に城ヶ白学園の受験者数は今を超える5000人を超えていた。

毎年毎年新入生が増えていった結果、2032年には生徒数が2000名を超える事態になっていた。

さすがに厳しいと思った一代目理事長は一学年600人以上いたが40人に絞る事にした。

そして2033年からは一学年40名、一クラス10名が義務付けられた。

城ヶ白学園は学期制。私服登校・下校になっている。

これが城ヶ白学園である。

### (3) 少女、体育館にて・

ノウリョクベツジユギョウ  
能力別授業とはまあ、その言葉の通りである。能力別に授業を行う時間であり、一日一時間ある。

小曾根凜は陰陽師、授業場所は校庭であった。が、強い風が吹いてきた為に体育館での授業となった。陰陽師は城ヶ白学園には1人、たった一人しか居ないのだ。なので一人授業となる。陰陽師担当教師は居ない。居るが小曾根凜はその教師を超えており、教える事が殆どもないのだ。

なのでいつも、小さい妖怪の退治をしている。

大きな妖怪の退治は放課後(夜)にいつもしている。

「体育館に一人・・・寂しい、悲しい、あああああああ？」

小曾根凜は一人、叫んだ。

そして小曾根凜は暇つぶしに・・・と陰陽術の練習を始めた。陰陽術は陰陽師が使う術であり、術を使う際は〇〇家流陰陽術、〇〇〇？となる。小曾根凜の場合、小曾根流陰陽術になる。

陰陽師は三つの一族に分かれている、と説明したのは覚えているだろうか。その三つの一族の陰陽師の人数は総勢233人。その内、陰陽術を使えるのは小曾根凜、そして凜の父。この二人だけである。陰陽師は陰陽術の他に結界・式神も使える。ちなみに、小曾根凜は陰陽術・結果・式神この三つが使える。

小曾根凜の陰陽術、それは桜を使った陰陽術である。

「小曾根流陰陽術、桜吹雪？」

すると、小曾根凜の周りに桜の花びらが何枚も・・・。体育館が桜の花びらで埋め尽くされた。体育館の端から隅っこまで花卉で埋まり、何も見えない状態になってしまった。

桜吹雪は相手を桜の花弁にある毒・睡眠薬で眠らせる、殺せる事が出来る陰陽術である。最強だ。いや、最強ではない。

小曾根凜は素晴らしい能力をもっているものの、陰陽術に関しては

得意ではないようだ。桜吹雪については特に。

桜吹雪はまだ、完全には完成してはいない。その為、眠らせる・殺す事は出来ない。小曾根凜が今の段階で出来るのは、ただ、桜吹雪だけである。

だが、他の陰陽術は完全・・・完璧と言っても良い位に素晴らしい。桜吹雪、散れ。」

「!?!」

体育館の中は私だけ と思っていた凜だったがその考えはどうやら外れだった様だ。

その瞬間、桜の花びらが茶色に変色しヒラヒラとどんどん床に落ちていく。

「俺、居ただけだ。」

「ゴッ、ごめんなさいッ!」

そう言つて小曾根凜は頭を下げた。「・・・ん?」と小曾根凜は何か気付いた。聞き覚えのある声、身近にいる様で身近にいない様な人。

「確か・・・」そう思った小曾根凜は頭をあげた。

「赤崎君!?!」

あかさき赤崎 こまね子夏、小曾根凜と同じく2・3。運動神経抜群・成績優秀、そしてルックスも良いと言う完璧美少年だ。

そして入学して一週間後にはファンクラブがあると言う位の人気である。その人気の秘密は性格にあった。「ドS」。そして悪魔。

その性格につられたファンクラブに入った者も少なくはないそうだ。彼は言霊使い。簡単に説明すれば彼が言った事は何でも実行される能力である。先程の小曾根凜の桜吹雪も赤崎子夏によって消滅させられた。だが、何でも実行されるとは限らない。言霊使いには実行して良いか・駄目かを判断する者が居る。一人ずつに。彼の場合は小さな天使。誰にも見えない天使である。

「赤崎君つて言霊使いでしたよね?言霊使いは体育館ではありませんよ?」

「サボりだよサボり。」

「だ、駄目ですよ？サボりなんていけません！だって

小曾根凜の説教の結果、赤崎子夏は呆れたのか自分の行くべき場所へ行く事にした。

赤崎子夏は言霊使い。だが、小曾根凜と同じく全国では十本の指には入る程の言霊使いであって教師が教える事はない。

「んじゃあな。」

「サボっちゃ駄目で・・・？赤崎君、待って下さい！」

赤崎子夏が体育館を出ようとした途端、妖気を感じた。ほんの少しの妖気だが小曾根凜は見逃さなかった。

「妖気0.7。大きさ3m21cm。体重170？。ターゲ

ット確認、攻撃開始。」

小曾根凜は妖気だけで妖怪の体重、身長までも分かっってしまう。妖気にも様々な種類があるのだ。今回体育館の外に居た妖怪は異獣いじゅう。江戸時代の書物『北越雪譜』で語られている謎の獣または妖怪である。異獣には二種類あり、サルに似ている異獣、熊に似ている異獣。殆どがサルに似ている異獣である。

「異獣、発見。結果、障壁。」

「ウツ・・・キーキー！キーキー！」

「滅。」

ポワンッ

異獣は一瞬にして消えてしまった。これが小曾根凜の力である。

「お前、すげエな・・・。」

「これ位、簡単な事です。」

小曾根凜、赤崎子夏。

二人には、何かがありそうだ。

(3) 少女、体育館にて・(後書き)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%95%B0%E7%8D%A3>

参考。

#### (4) 少女、友と。

次の日、小曾根凜はDABをいじっていた。土日、小曾根凜は「FKドーム」で吉倉亜美佳と待合わせをしていた。

DABと言うのは様々な機能が備わったテレビ・携帯型情報端末である。現在、テレビ時代が終わった今、DAB時代。DABでは15局以上のテレビ番組を見れてたり離れた友人や家族とメールやチャットが出来たり、ショッピングが出来たり・・・いわば、電子端末。

最初に戻り・・・と、言うのは吉倉亜美佳には好き・・・いや、愛している美少年アイドルグループがある。その名は「color6」。美少年で結成されたアイドルグループであり、10代からの指示が90%ともっとも今、ブレイクしているアイドルグループである。

「color6」、つまりは6人居る事になる。メンバーにはそれぞれのイメージカラーがあり、ピンク・黄色・黒・水色・青。

お気づきだろうか。5色しかない事に。あと一色、それは情熱の赤。現在は何らかの理由で活動を休止している為に5人で活動をしている。

今日は「color6」の初LIVEである。

「遅れてごめん。いやさあ、こんな大切な日に寝坊しちゃってさ・・・」

「別に良いですよ。」

小曾根凜の今日のファッションは、ピンクの可愛らしい花柄ワンピースに黒いカーディガン。長い黒髪はポニーテールに、そしてピンク色のリボンが着いたカンカン帽。足黒い小さいリボンが着いたパンプス。と、可愛らしい格好で来た。それに対して吉倉亜美佳は黒いスキニーパンツに白いネットクロングTシャツ、黒いジャケット、そして足はスニーカーとシンプルな格好で来た。

「亜美佳、シンプルな格好で来ましたね……」

「何言ってるの！？そんな凜みたいな格好してたら騒げないじゃない！LIVEは騒ぐ為にあるようなもんよ？……今日は騒ぎまくるわよ！」

そんなこつちゃ、小曾根凜は知ったこつちやない。吉倉亜美佳はいくつものアイドルグループのLIVEに行っており、LIVEに関しては詳しいが小曾根凜はLIVEなど行く暇はなく、毎日の様に陰陽術の修行ばかりだった。為、「color6」と言うアイドルグループも知っている訳がないのだ。

「私達つて幸運よねえ……」

「何で？」

「だって、color6のメンバーが全員私達の通ってる学校に居るんだもの」

color6は元々、城ヶ白学園で結成されたアイドルグループでありとある生放送番組に出演した事から「カッコイイ」「イケメン」などの評判が良かった事から正式に活動する事になったのであった。もちろん、活動を休止している一人も城ヶ白学園に居る。

メンバーは城ヶ白学園高等部の1〜3年の生徒で結成しており、別名「神グル」（神なグループの略）とも言われているそうだ。

「そうなんですかあ……それは初めて知りました」

「リアクション薄ッ……あ！もう入場始まってんじゃないさ、行こ！」

吉倉亜美佳は小曾根凜の腕を強く引つ張り、会場へと入った。

(5) 少女、初LIVE .

小曾根凜と吉倉亜美佳はドームに入り、チケットに記入されている番号の席に行った。どうやら小曾根凜と吉倉亜美佳の席は運よくアリーナ席だった様だ。

このドームは舞台に一番近いアリーナ席、そして次に近い一階席、二階席、そして三階席まであり、ファンがいつも狙っているのはもちろんアリーナ席である。その他、芸能人や海外の有名な人物が座る「特別席」と言うものが二階席にある。

「ねえ凜、お茶買ってきてくれない？」

「あ、はい。良いですよ。」

「後でお金は渡すからお願いね？ . . . あ、たぶんLIVE開始まで30分以上あるから大丈夫だと思うけど、もしもLIVEが始まったらお茶は諦めて帰ってきて良いからね？」

「は、はい。」

そして小曾根凜は席をはずれ、お茶を買いに行った。

FKドームには、メインドーム（スポーツやLIVEをする場所）の他にフードコーナーが存在する。フードコーナーでも九つあるのだが全てが20分待ち。フードコーナーは早く行ったもん勝ちである為に遅く行った者は欲しかった食品や飲み物が売り切れだった場合もなくはないのだ。

何分経っただろうか。あきらかに10分は経った頃であった。

『キヤあああああああアツ？』と言う声がメインドームから聞こえてきた。その途端、並んでいた客がザワザワと動き出し、メインドームへ。その為、九つの店はガラガラになり、小曾根凜はお

茶を買う事が出来た。

「ちよつと位遅れても大丈夫ですよね。」

そう呟いた小曾根凜はもう一つのお店で自分が食べるチョコロスと飲み物の紅茶を買った。

．．．．シユンツ

「！妖気！．．．．こんな所に妖怪が居たら多くの犠牲者が．．．

すると小曾根凜はすぐさま脳を集中させ、妖怪の妖気や情報などを調べ始めた。

「妖気9．2。大きさ5m12cm、体重117．kg。ターゲット確認。こうげ

小曾根凜は思った。『今ここで戦ってしまうとメインドームに居るファンの方達が．．．』と。そう思った小曾根凜は攻撃を辞めた。．．．いや、辞めた訳ではない。このまま滅しなければメインドームへ妖怪が入り、沢山の犠牲者が出るに違いない。

そして小曾根凜は思った。『メインドームに居るファンの方達を別の場所へ避難させて此处で私と妖怪が戦えばいい』と。そして小曾根凜は買った物をその場に置き、メインドームへと入った。

（ ） 「でもまた二人で歩いて行きたい あの楽しかった時を思い出して きつとまた会えると信じるよ？」

（ ） 「だから君が思い出になるまえに君と思い出を作ればよかった」

メインドームに入った途端、大きな音とファンの声が小曾根凜の耳に入った。だがそんな事は気にせず、小曾根凜は作戦を決行しようとした……が。どうやって避難させるかを考えていなかった小曾根凜は困った。

「……もうッ……しょうがない……」

すると小曾根凜はアリーナ席へ向かい、「あ、凜」の吉倉亜美佳の言葉を無視してアリーナ席の一番前の席にやってきた。

「あのッ!……」

(5) 少女、初LIVE・(後書き)

歌詞は<http://www.kashizo.com/bbs/lyrics/lyght.cgi?page10>="val"のまた  
会える日までをお借りしました。

(6) 少女、楽屋にて・

小曾根凜のちっぽけな声はファンの声とcolor6の歌で打ち消された。

「あのツ・・・!」

「あんな邪魔。」

「キヤツ!」

小曾根凜が舞台の方に手を伸ばすと、近くに居たファンに足を蹴られた。だが、小曾根凜は諦めなかった。小曾根凜は約束した。誓った。『皆を守る』と。そして『戦いに勝つ』と。

「あの!このLIVEをやめて下さい!お願いします?」

「だから邪魔なんだよ、お前!」

「キヤツ!・・・」

叫んでは足を蹴られ、叫んでは足を蹴られの繰り返しだった。でも、小曾根凜は諦めなかった。約束は守らなくてはいけないから。そして犠牲者を出さない為にも。

そして、小曾根凜の足がグダグダになった頃に

( ) 「でももう戻らない恋さよならまたいつか会・・・」

とまった。

「やめてツ・・・下さい!・・・LIVEを・・・やめて下さい

い!・・・ここに居る皆さんが危険・・・なんです・・・ッ」

すると、会場がざわつき始めた。

「スタッフさん、音楽とめて下さい！」  
気付いてくれた。

気付いてくれた事に小曽根凜は嬉しかった。すると間もなく会場にアナウンスが流れた。「申し訳ございません。少々お待ち下さい。」と。

「そのワンピース着てる女の子、こっち来て。」

「へ？」

メンバーの一人に無理矢理腕を引っ張られて楽屋へ向かった。

### 楽屋。

「足、大丈夫？　．．．僕、君の事見てただけけど何言ってるか分からないくて．．．。ファンの子だと思ってスルーしちゃったけど違ってたんだね．．．。」

「だ、大丈夫ですよ．．．この位．．．。」

「それでなんや。」

「は、はいっ．．．。」

自分が城ヶ白学園に通っている陰陽師である事、そしてこのLIVE会場に妖怪が居る事を一生懸命かれた声で伝えた。するとメンバーは．．．

「「ふ〜ん．．．だったら僕達も協力するよ。」」

「．．．．協力する．．．。」

「なんや．．．分かったわ。特別に協力してやるわ。」

「分かった。僕、頑張るね！」

「あ、ありがとうございます？」

すると小曽根凜はメンバー全員に作戦を伝えた。そして、全員が理解した所でスタッフを呼び、この事を全て伝えた。アナウンスも流した。「只今、機械故障がございました為にお客様にはご迷惑をおかけしますが．．．と。アナウンスが流れると、そろそろとファン達が外へ出ていく。」

一安心した小曾根凛を含む全員は次の行動にうつった。



小曾根凜は悪鬼を切ろうとした……が、遅かった。

「魔法陣発動、人悪天消滅。」

「魔法陣!?!」

すると小曾根凜は黄色い光で包まれ、その黄色い光はその場で爆発した。

メインドームは爆発時の煙で埋め尽くされ、残っているのは

小曾根凜の紅桜。 . . . 小曾根凜は倒れていた。でも何故こんな事で倒れてしまったのか。そう、あの時だ。妖怪が居る事を伝えようとした際にファンに足を蹴られて怪我をしてしまった。いや、怪我をしてしまったどころではなく、骨折をしていたのだ。

「. . . . ツく. . . .」

「終りだ、小曾根凜。」

すると天井から鉄の棒が何本か落ちてきた。「終り. . . . か. . . .」そして小曾根凜は目をゆっくりと閉じ、手を強く握った。

「発動、レヴィアタン!」

小曾根凜は目を開けた。

自分の真上には大きな龍の様な者が居た。レヴィアタン、旧約聖書に登場する海の怪物（怪獣）。悪魔と見られることもある。そんなレヴィアタンが何処から出てきたのか不思議に思った小曾根凜はキョロキョロと周りを見回した。

「ツち. . . . 仲間が居たのか. . . .」

「レヴィアタン、攻撃。」

「!」

その途端、ブッシュューツと赤い液体がメインホールを埋め尽くした。悪鬼は滅しられた。

(7) 少女、危機一髪・(後書き)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%82%AA%E9%AC%BC>  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%82%BF%E3%83%B3>

参考。

(8) 少女、車椅子・

「どうしたん？5本指に入る程の陰陽師さんが。」

「な、何でもないです・・・ただ、ちよつと・・・」

「ん？」

「あ、えつと・・・ありがとうございま・・・痛ッ・・・」

小曽根凜が立とうとした時、凜の足に激痛がはしった。立とうとした小曽根凜はその場に倒れた状態になってしまった。

すると、小曽根凜を助けたメンバーの一人が凜を抱いて何処かへ走り出した。

城ヶ白学園、保健室。

「・・・・・・・・あれ・・・・ここ・・・・学校？」

「凜ッ・・・・ごめんッ・・・・」

「え？」

ベットの横には吉倉亜美佳が涙を流して小曽根凜の手をギュッと握っていた。小曽根凜が倒れた後、メンバーの一人が保健室に連れてきた。すると、凜のDABに電話がかかってきた。その相手は吉倉亜美佳で小曽根凜が倒れたと言う事を知らずに電話をしてきた。すると、その電話に気付いたメンバーの一人が電話にでた。・・・小曽根凜が倒れた事を知ると、吉倉亜美佳は急いで城ヶ白学園保健室に。そしてその後、color6のあとの5人が到着した。

「いじめッ・・・・」

吉倉亜美佳は涙をポタポタとたらしながら小曽根凜に言った。

「いえ、亜美佳やファンの方々が無事だったら良いんです。」

「でも・・・・ッ・・・・凜、車椅子・・・・だよ？」

「はい、大丈夫ですよ。車い・・・・・・え？」

吉倉亜美佳の話によると、専門家の医師に見てもらったところ、酷い骨折で治るのは遠い話だそうで長くて1年治るまでにかかるそう

だ。

その話を聞いた小曾根凜は、「お、陰陽師としての仕事が・・・」  
と言つて布団の中で丸くなった。

「でも、・・・color6の皆様の近くにいられるとは思つてな  
かつたかも／＼」

「あれ？もしかして、僕達のファンだったりしちゃう？」

「は、はい！」

「車椅子は良いとして、・・・その・・・お名前が・・・」  
すると

「僕は森史兎<sup>もりふみと</sup>。1 - 1。傀儡師<sup>くわいじし</sup>。宜しくね あ、城ヶ白学園生徒会  
副会長だから困つた事があつたら何か言つてね」

傀儡師、それは靈力の籠つた人形を操る術師。傀儡は自ら動くもの  
や、糸で操るものなど、様々なものが存在して、形状も、西洋のマ  
リオネットから東洋の浄瑠璃まで多種多様。生きた鎧<sup>リビングアーマー</sup>のようなもの  
も作り出すことができる。小曾根凜は、1年で生徒会メンバー入り

の事を知つてビックリした。城ヶ白学園の生徒会はよっぽど親の位  
置が高いか成績優秀ではなくてはメンバーにはなれない。ほとんど  
が3年だ。

「俺は草野拓斗<sup>くさのたくと</sup>や。3 - 1、魔獣使い。よろしゅうな。」

魔獣使い、魔獣と呼ばれる特別な生き物をパートナーにし、その力  
を引き出すことによつて様々なことを行う。この魔獣にはいわゆる  
『魔獣』のみならず、『幻獣』や『聖獣』、『霊獣』、場合によつ  
ては『神獣』や、一般的な動物も含まれる事もある。魔獣使いと共  
にあり、強い絆で結ばれ、その力を引き出されることが出来る生物  
が魔獣使いの魔獣。なお、しゃべれない「魔物」であつても、使役  
者は意志の疎通が出来る。

草野拓斗の場合、レヴィアタン（リヴァイアサン）、ベヒモス（バ  
ハムート）、ケルベロス、クー・シー、セイレーン、クラーケン、  
ファープニル、フェンリル、キマイラ、オルトロス、ヴリトラ（ブ  
リトラ）、ヤマタノオロチ（八岐大蛇）、ヒュドラ、バジリスク、

アンフェスバエナ（アンフィスバエナ）、四凶の殆どの魔獣を召喚する事が出来る。

「雲原洗貴。2 - 1 . . . 魔導師。水使い . . . .」

無口。それが小曾根凜が一番に思った事だった。

独立して自らの意思で魔法を使う者や導師的立場の者の事である。

水使い、water magicは水を中心とした魔法を使える人の事を言う。

「僕は榊谷直人。3 - 1、洗貴と同じく魔導師で水使い。」

「俺は榊谷空斗。3 - 1、魔器使い。」

「あの . . . 双子さんですよ？どちらが兄さんなんですか？」

「僕。間違えないでね。」

魔器使い、魔力の込められた品物を扱うものを『魔器使い』と言う。

その品物が武器の場合は、特に『魔剣使い』と呼ばれる。『魔器』

と術者は強い絆で結ばれている。それは『契約』かもしれないし、

『共生』かもしれない。術者は『魔器』をひとつ指定。その魔器は

術者以外には扱えない。

空斗の魔器は、小曾根凜の持っていた様な紅桜と同じ様な剣、「青

桜」。

「私は小曾根凜です。先程ご説明した様に陰陽師です。えっと . . .

あ、宜しくお願いします。」

「私は吉倉亜美佳。2 - 3、あ、凜と同じ。超能力者で三つ位能力

があるんだけど . . . まだ全然で . . . . あ、宜しく。」

「亜美佳、いきなりタメ口で良いのですか？」

「え？だって私、そーゆーキャラだし。」

「あ、気にしないで。僕達も今度からタメ口にするね。だから凜ち

やんもタメで良いよ？。あと、これからは名前に「君」とか「さん

とか付けない事！これ、約束ね！」

森史兎の天使の様な笑顔に小曾根凜は「はい」と言うしかなかった。

出会い。

小曾根凜にとって、それは運命を変える出会いになったのかも知れない。

(8) 少女、車椅子・(後書き)

参考ホームページ

<http://sakuya.main.jp/arts-mag>  
[ic.htm](http://sakuya.main.jp/arts-mag)#陰陽術

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AD%94%E7%8D%A3>

(1) 少女、夏・

車椅子生活から何カ月か経ち、夏。そう、夏休みの季節がやってきたのだ。夏休みと言ったら「海で彼氏または友人と遊ぶ」「プールでキャピキャピと遊ぶ」などと言った事が定番だろうか小曽根凜にはそんな事は出来ない。

どうやら小曽根凜の体はどうかしている様で骨折は一ヶ月で治ってしまった。では何故、そんな事は出来ないのか。簡単に言えば修行である。全国でトップの陰陽師だがいつ、一位の座を奪われるか分からない。そして最近、妖怪の出現が多く、一ヶ月で100匹以上は城ヶ白学園付近で出現しているからである。先々週から今週にかけては人にばけている妖怪が多いだとか。

「ふう．．．．．小曽根流陰陽術、紅桜？」

紅桜、悪鬼退治の際にも使った小曽根家トップがもつ剣である。前も言った様に小曽根凜はこの剣をまだ使いこなせていない。強力な力がある、そして集中力が必要なのだ。使いこなせずこのままでいると、紅桜に全てを乗っ取られて本当の自分に戻れなくなる可能性もある。

「．．．剣を持てる位にはなりましたね．．．」

紅桜を持った小曽根凜の目は白くなり、髪も白くなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0507y/>

---

少女、陰陽師.

2011年12月2日20時46分発行